

史跡池上曾根遺跡96現地説明会資料

—古代ロマン再生事業平成8年度整備事業発掘調査—

1997年2月8日

和泉市教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター

1. はじめに(図1~3・8・9)

今年度は、池上曾根遺跡における古代ロマン再生事業(大規模遺跡総合整備事業)の2年目にあたります。昨年(1996年)の発掘では、弥生時代中期後半の「巨大神殿」ともいわれる大形建物1や大形井戸(図8・9)の、柱根と井戸枠の取り上げにともなう調査ほかを実施しました。その過程で、年輪年代測定によって大形建物1柱穴12の柱が紀元前52年に伐採されたことが判明しました。これまでの弥生時代の暦年代の推定を最大で1世紀近くもさかのぼらせた大きな成果です。数年もすれば、教科書の年表に暦年代付きの池上曾根遺跡が登場するでしょう。今年度はあらたに96-1区を設定し、遺跡中心部と環濠周辺の間の発掘をおこなっています。また前年からのつづきとして、95-2~4区では大形建物1の周辺部、94-1区では大形建物1の前身遺構の発掘を実施しています。調査は継続中ですが、大形建物1が建てられた弥生中期後半(暦年代では紀元前50年前後)ごろの成果を中心に述べます。

2. 成果の概要

(1) 遺跡中心部と環濠周辺の間の調査(96-1区、図4・5)

遺跡南部におけるこれまでの調査では、2条の環濠の周辺には竪穴住居が密集する居住区があることがわかっています。一方、その北約150mでは、大形建物1や大形井戸が築かれ周囲に石器剥片材などを埋納した、特殊で非日常的な空間が形成されています。96-1区は、それらの間に設定しました。調査の結果、調査区南側は、谷あるいは湿地状地となっていて遺構はほとんど確認できません。この谷は、弥生前期からみられる自然地形で、95-1区北半や93-2区北端で確認した谷状落込みの続きにあたります。それに対して、調査区北側では、多くの柱穴、溝、掘り込み穴などを密集した状態で検出しました。柱穴は掘立柱建物や柵の一部と推定でき、数多くの掘立柱建物などが存在したことがわかりました。建物や溝などの主軸は、正方位にほぼあうものと自然地形に沿ったものがあります。前者の存在は、北方の大形建物1の主軸がほぼ正方位にのる点と関連して注目されます。さらに重要なことは、本区では全く竪穴住居が確認できないことです。このことは、東西に広がる谷(湿地)をはさんだ南北対岸で、建物の種類が全く異なる事実を示します。なお、谷の岸近くで土器埋設遺構を2基検出しました。大形壺が口縁や底を打ち欠かれて埋められています。本遺跡では同じような遺構がこれまでも多く確認できており、土器を枠にした小形井戸あるいは水を使う何らかの施設と推定できます。

(2) 大形建物1・大形井戸周辺部の調査(95-2~4区、図6)

大形建物1の南面東側で検出された「東脇殿」(南北棟とされる大形構造物)と同様な施設が向かい側にも想定されたこともあり、その「西脇殿」ともいべき構造物の有無確認のため95-2・3区を前年に設定しました。今回の調査では、想定「西脇殿」の南端部(95-2区)では掘立柱建物群が、北端部(95-3区)では大形井戸排水用や区画用の東西溝群が検出され、大形南北棟になる遺構は全くありません。かつて想定された「西脇殿」は、この位置には存在しないのが確実となりました。そのかわり、95-2区では南側からの続きで掘立柱建物群が、95-3区では、東西溝以外に、大形建物1の西端を区切る南北溝、柵、柱穴列、炬の可能性がある遺構などが発見できました。また、95-4区では、大形建物1より古い時期の掘立柱建物や柵は確認されましたが、中期後半の施設はほとんどありません。調査は継続中ですので、大形建物1周辺の遺構群の最終的な評価は今後の課題にしたいと思います。

(3) 大形建物1の前身建物などの調査(94-1区、図7)

大形建物1の柱穴周辺の遺構の調査も実施しつつあります。大形建物1とおおむね同位置ではほぼ同規模の、前身建物となる可能性をもつ柱穴列が確認できました。図7に示したA・Bがそれで、A→B→大形建物1の順に建てかえられています。Aの柱穴のいくつかには、直径35cmほどの柱根がのこっています。ただし、このAでは建物2棟が東西に並列している可能性もあります。Bの柱穴は、大形建物1とほぼ重複しているため大形建物1の柱穴間でかろうじて確認できるだけです。柱根も全くのこっておらず、不明確な点が多くあります。この他に、大形建物1の内側では、小形柱穴列(図7のC)が存在します。遺構の重なり具合や出土土器などから推定して、柱穴列Cは大形建物1と同時期の可能性がありますが、もしそうならば、大形建物1の床をささえる床束の柱穴列とも考えられますが、断定できるまでにはいたっていません。

3. まとめ—環濠内部の空間利用—(図5)

今回の大きな成果は、弥生中期における遺跡中央南部の利用状況が具体的に判明したことです。南から順にみると、2条の環濠の周辺では竪穴住居が密集する居住区があります。その北端は、東西にのびる谷(湿地)の岸まで広がります。南側は、92-2区と93-2区の南で、現地表面がやや低いことや立会調査成果から谷部が予想でき、そこが南限になると予想できます。このことから、竪穴住居群は、環濠を中心とした南北約50m幅で帯状に東西に分布すると推定できます。竪穴住居群の北側の谷(湿地)は南北幅約40mを測ります。谷をこえた北側の南北約50mの間(96-1、95-2区他)では竪穴住居は全く建てられず、掘立柱建物群から構成される一帯がひろがります。その北東部(92-1区他)は、掘立柱建物群からなる工房とも推定される地域にあたります。それら掘立柱建物群地帯の北西部に、大形建物1・大形井戸や埋納遺構群の存在する非日常的空間(94-1区他)が形成されるわけです。大形建物1の北西部(95-4区)は、大形建物1と同時期ではほとんど利用されていません。一方、大形建物1の北東一帯は、発掘がおこなわれていないので詳細は不明ですが、現標高が環濠内部で最も高く、中核的施設が存在すると推測される地域にあたります。

このように、環濠集落内部が、自然地形を利用しつつ(あるいは制約をうけながら)、利用状況や配置施設が整然と分けられていた事実を明らかにできた点は重要な成果です。ただし、例えば、竪穴住居群と掘立柱建物群の分布のちがいが、集落内の人々の階層差による居住域の相違であるのか、また工房域と居住域という空間利用の区分によるものか等々、明らかにすべき問題は山積されています。これには出土遺物の分析などが有効と思われるのですが、今後の課題として検討を続けたいと考えています。

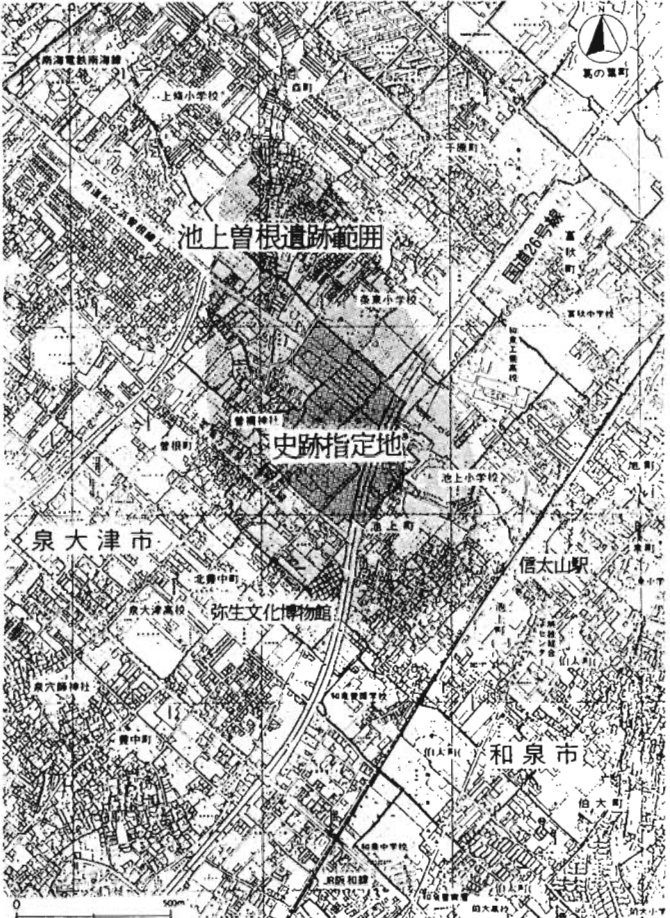


図1 池上曾根遺跡周辺図

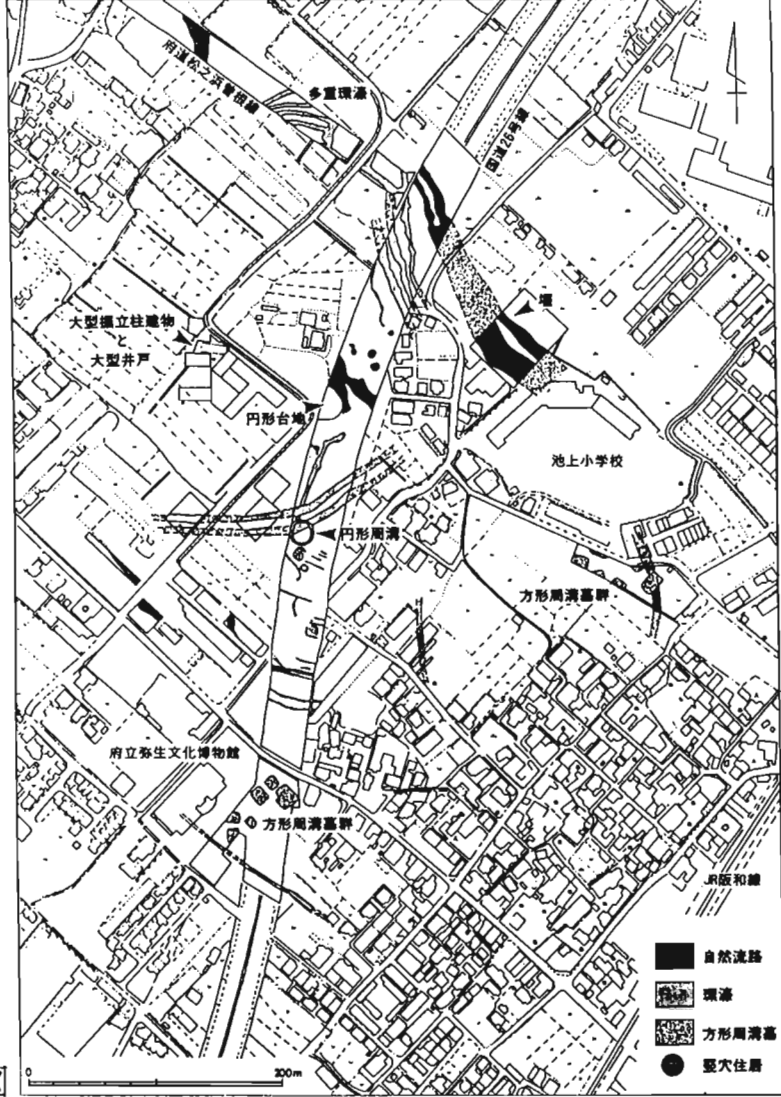


図2 池上曾根遺跡主要遺構分布図

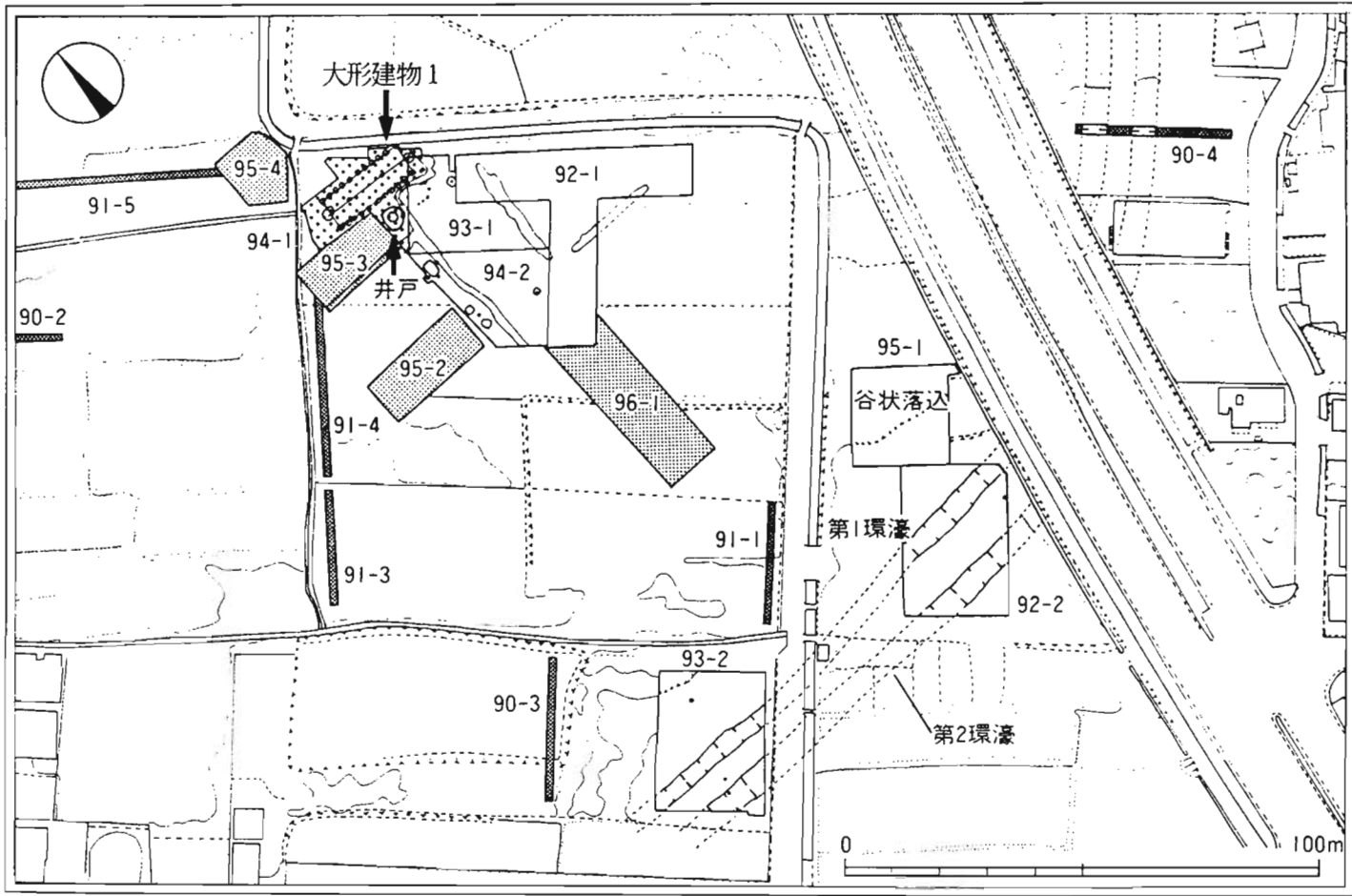
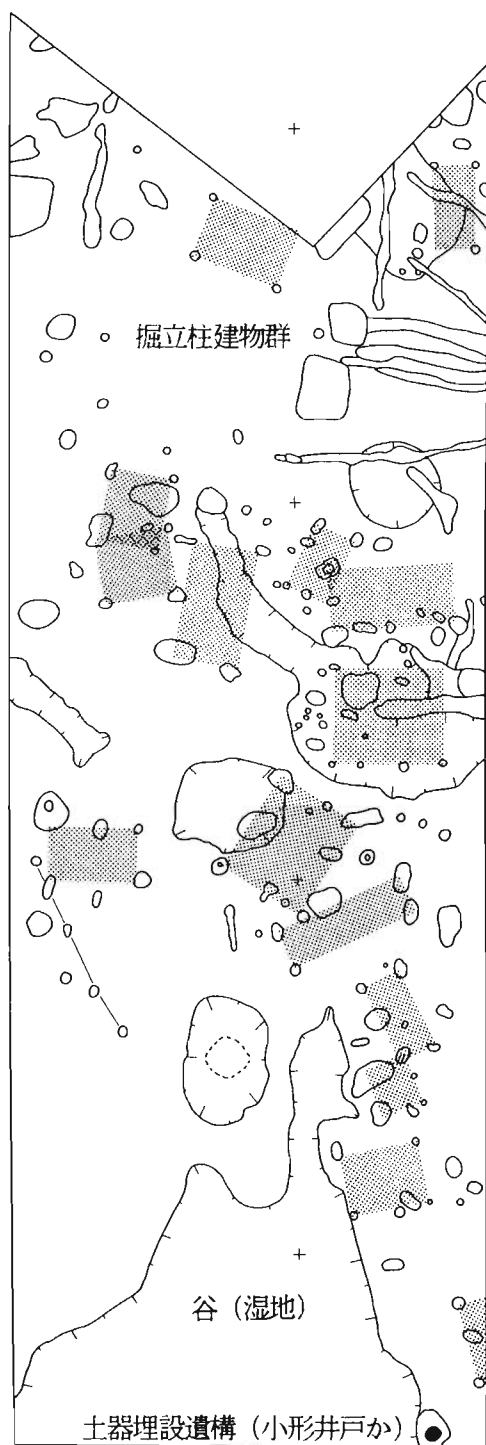
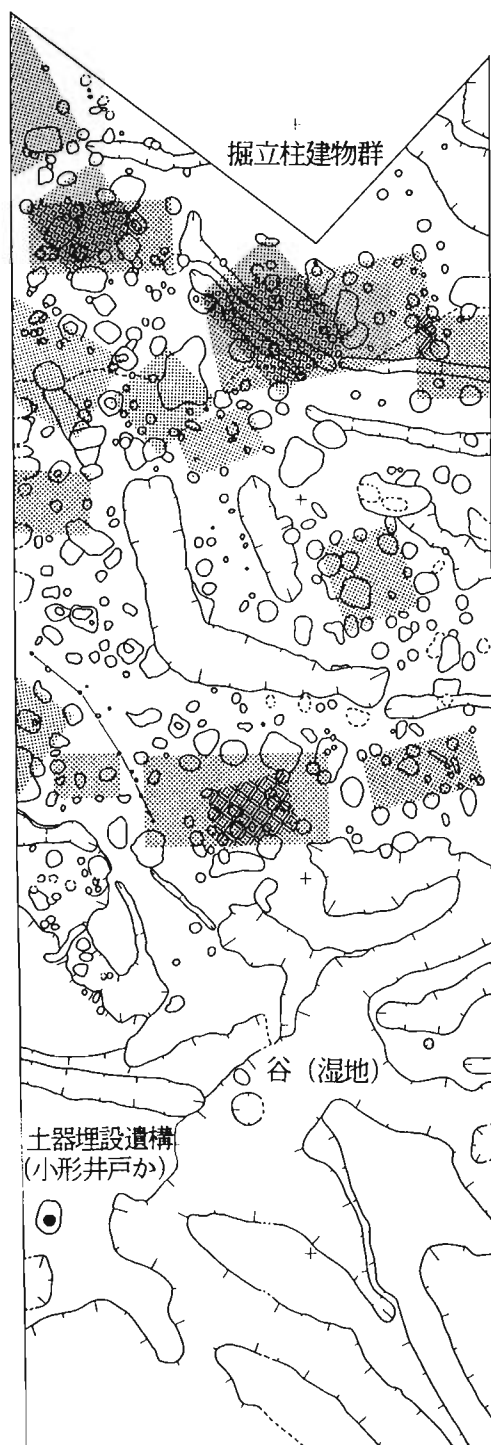


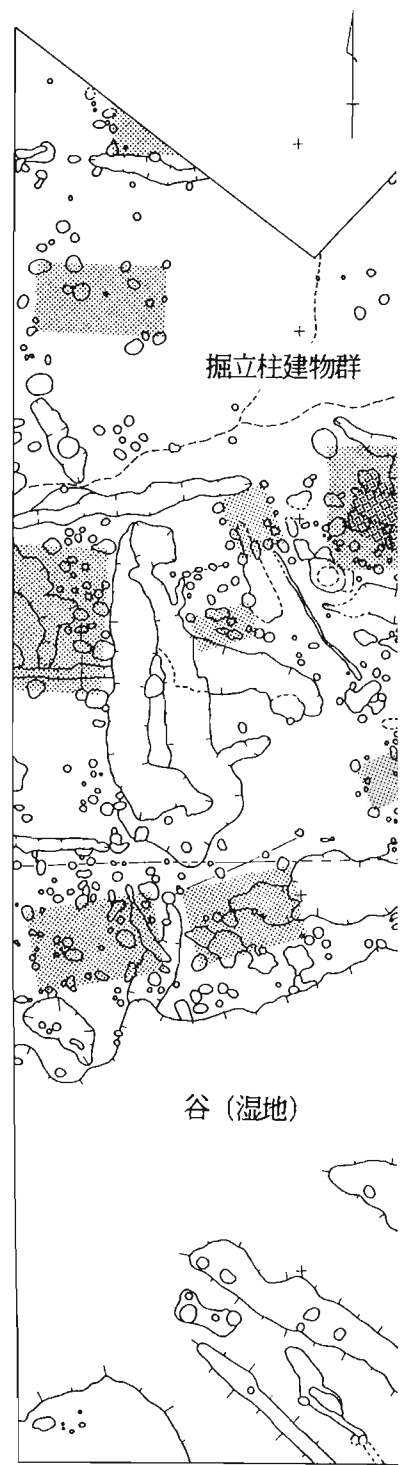
図3 史跡整備のための主要発掘区位置 (今年度発掘区：96-1, 95-2~4, 94-1)



弥生中期後半～末ほか (第4面)
 (大形建物1 とほぼ同時期～直後)



弥生中期後半ほか (第5面)
 (大形建物1 とほぼ同時期)



弥生中期中葉ほか (第6面)
 (大形建物1 の直前期)

0

20m

(建物・柵は推定復原案)

図4 遺跡中心部と環濠周辺部との調査 (96-1区)

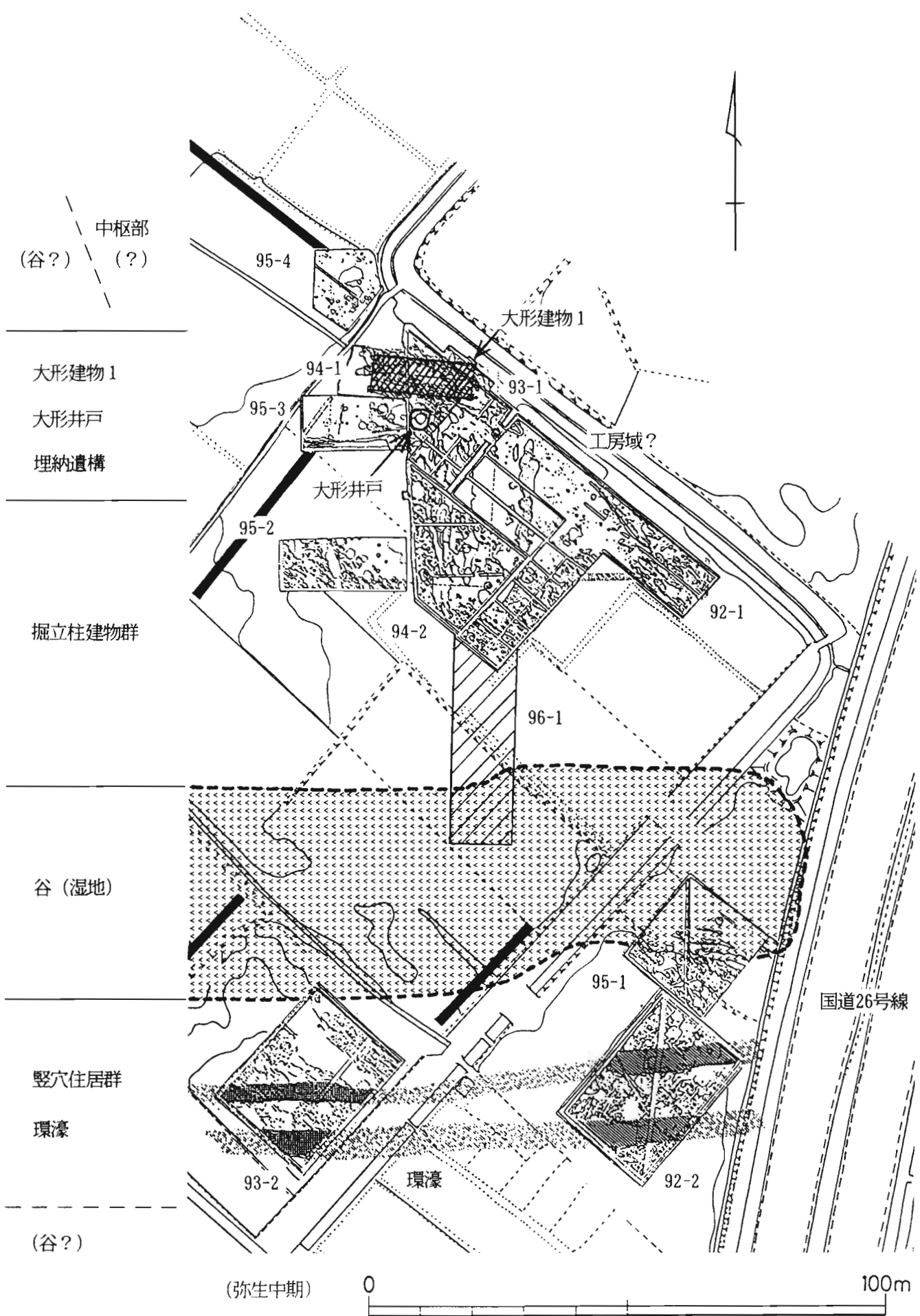


図5 遺跡内部の空間利用概念図

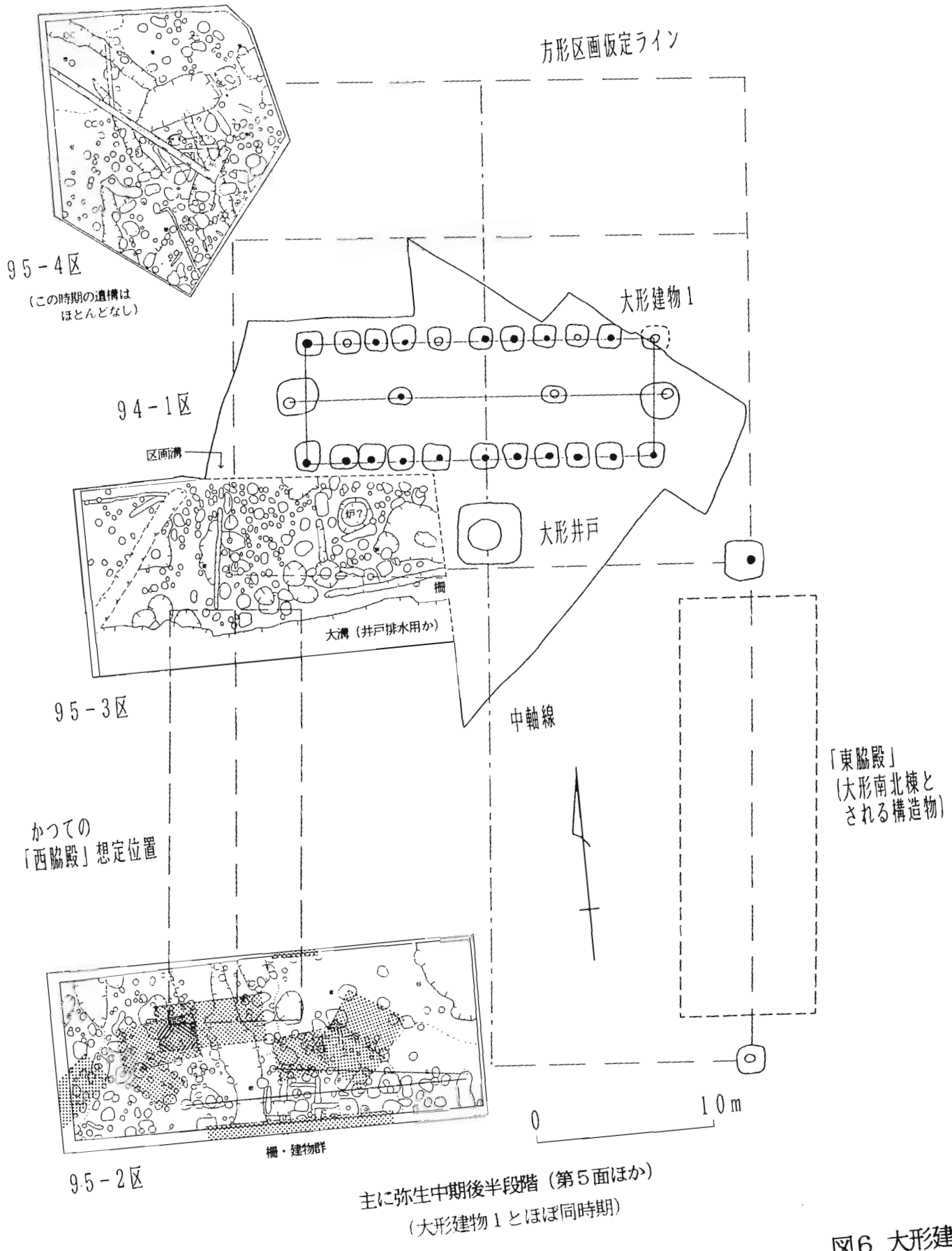
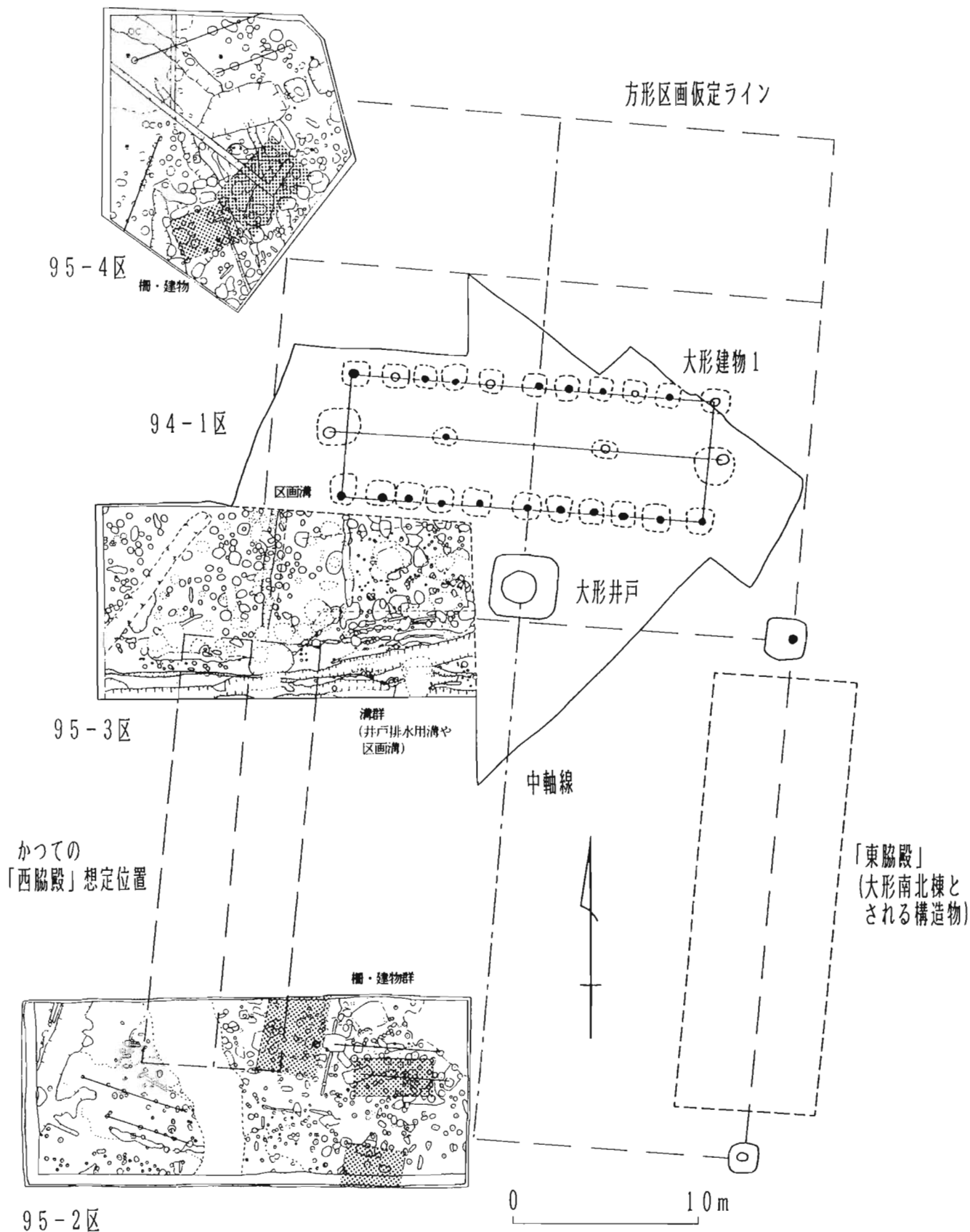


図6 大形建



主に弥生中期中葉段階 (第6面ほか)

(大形建物1の直前期)

は推定復原案)

辺部の調査 (95-2~4区)

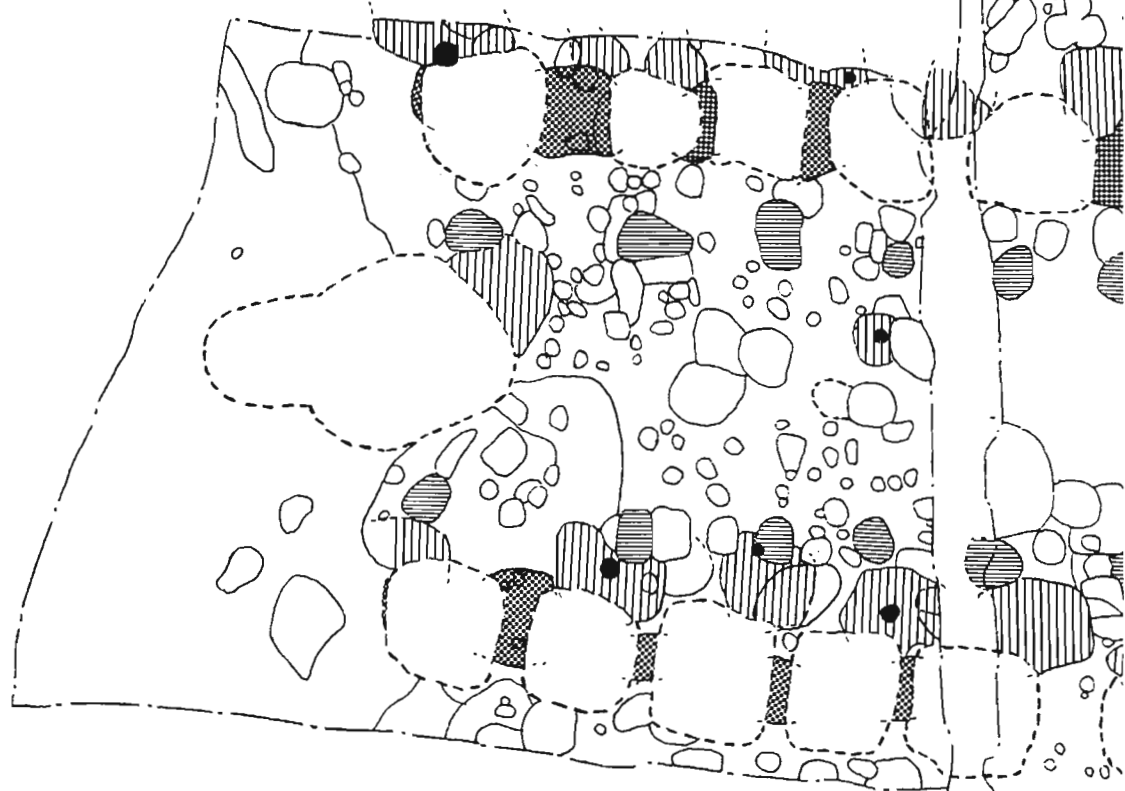


図7 大形建物1の前身建物等の調査 (94-1区)

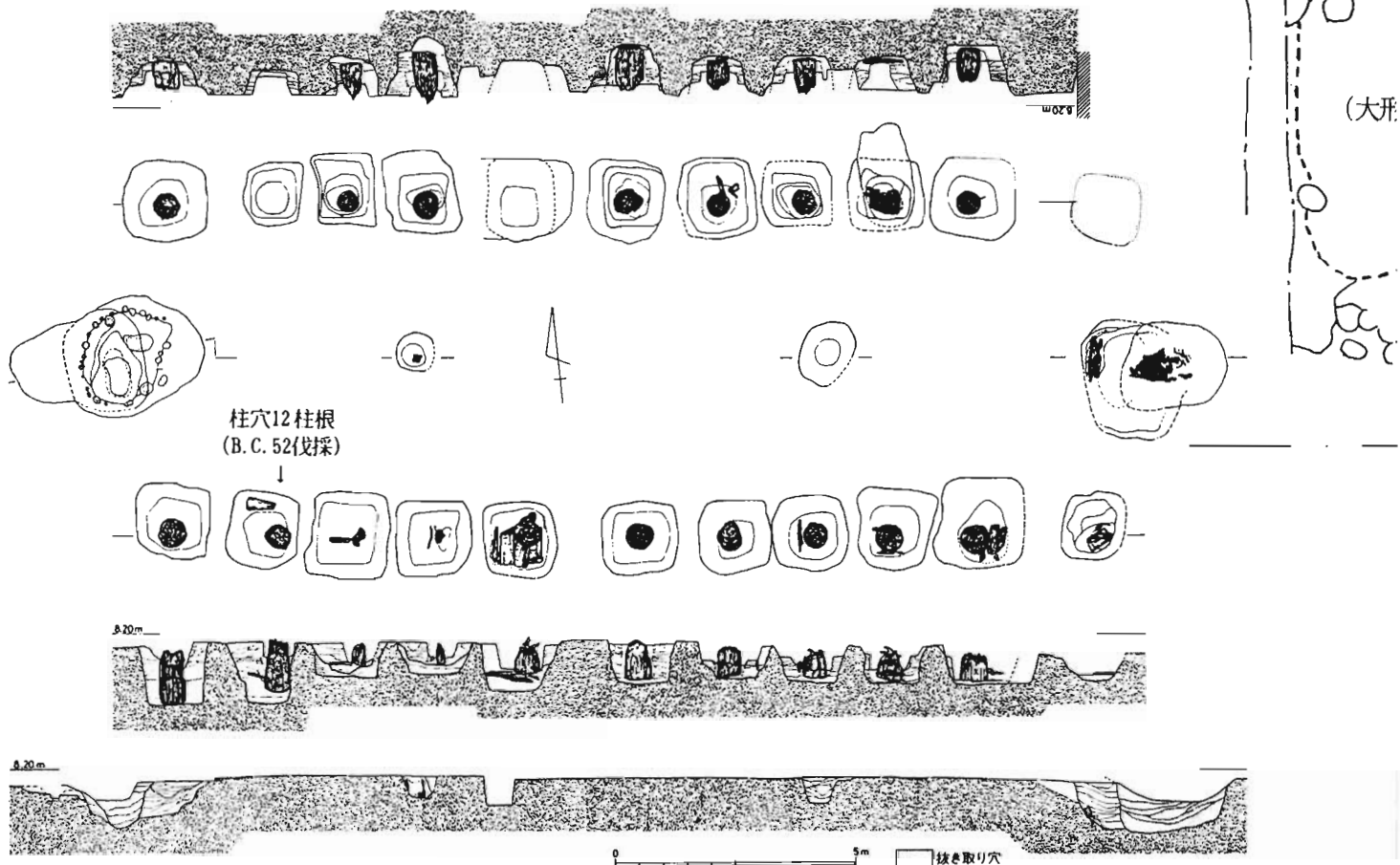


図8 大形建物1の実測図 (94-1区)

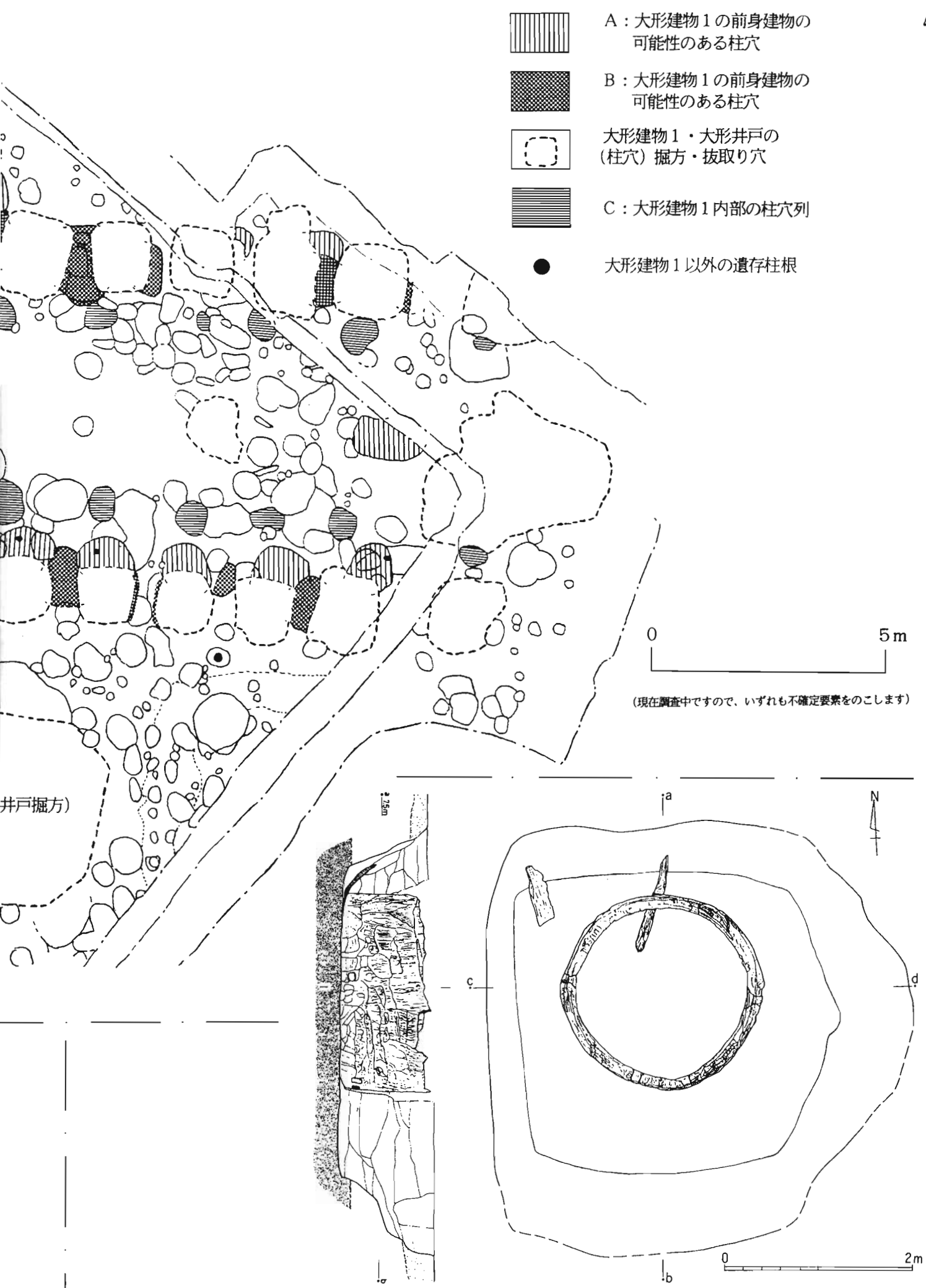


図9 大形井戸の実測図 (94-1区)